

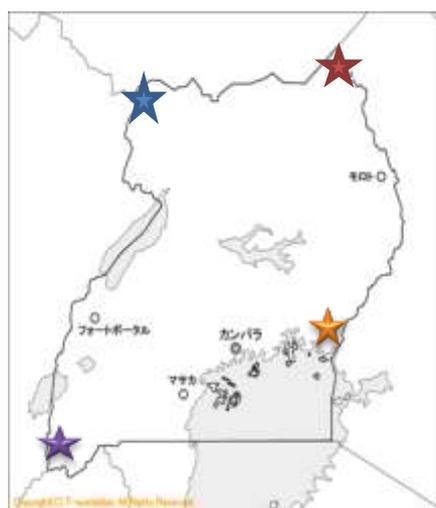
カンパラ通信～ナカセロの丘から

第29回 ウガンダの四隅踏破行

新年明けましておめでとうございます。私は新しい年を温暖なカンパラで迎えました。日本は冬の真ただ中と思いますが、ここカンパラに冬は無く寒さとは無縁で、快適な温度の中で過ごしております。本年も日本とウガンダとの関係がより一層進展していくような限りの支援をしていく所存です。どうぞ宜しくお願いします。

さて、2019年年頭に当たる今回どのような話題を取り上げるかを考えました結果、過去2年半の私のウガンダ在勤の間に達成できた事項をご紹介しますことに致しました。紹介文の中には既にカンパラ通信でご披露した部分と重なることもあると思いますが、ご了承下さい。

大使としての役割柄、私はウガンダ国内を広く訪れる機会があります。訪問先は草の根・人間の安全保障無償資金協力の完成案件の引渡式への出席（この辺りのことはカンパラ通信第8回をご参照下さい）。また、難民居住区の視察、ウガンダの地方治安状況の観察、地方で開催されるウガンダ政府の行事への参加やウガンダ政府の高官からの要請による地方訪問も含まれます。その過程でウガンダの北西端・北東橋・南西端・南東端と四隅を探訪することができましたので、訪問順にご紹介してまいります。私自身の訪問先での出来事とともに、それら4つの地域の町や国立公園がそれぞれ違った意味でウガンダにとって重要な役割を果たしていることを理解していただければ幸いです。



1 北西端のオラバ町

オラバの町は、ウガンダ北西端に位置するコボコ県の中でも南スーダンとコンゴ民主共

和国と接する三ヶ国の国境地点から僅か数kmのところであり、南スーダンとの国境地点の一つとなっています。2016年7月に南スーダンの首都ジュバで騒擾事件が勃発しました。これを契機に大量の南スーダン人が難を逃れるために国境を越えて周辺諸国に難民として流出しました。ウガンダはこれら南スーダン難民の最大の受入国となりました。その数はたった3週間で5万2000人に達しました。その為南スーダンと国境を接するウガンダ北部の西ナイル地域に新たな難民居住区が急きょ設けられました。同年9月初旬、UNHCRが南スーダン難民を受け入れている西ナイル地域のビディビディ居住区への視察をアレンジしてくれました。オラバ町はその視察旅行の一部に組み入れられていました。当時南スーダン難民の大半がこの国境を通過してウガンダへ入国してきていたからでした。



(南スーダンとの国境)



(入管施設前にたむろする難民)

南スーダンとの国境線は両国間の窪んだあたりに沿って引かれていて、ウガンダの入管施設から実際の南スーダン国境への道は下り坂になり、南スーダン領に入っていくと道が上り坂になるのが見えました。印象に残っているのは、国境線を境にウガンダ側の道路が舗装されていたのに対して、南スーダン側の道路は赤土の道だということでした。そして、その道を女性と子ども達がわずかな身の回りの品を手に携え、あるいは頭に載せてゆっくりと歩いてウガンダ側に来る姿です。彼女たちは入管事務所に並び難民として仮登録されUNHCRが仕立てたバスで一時的受入センターに移動し、そこで少し振りであらう食事をし休憩を取ってから隣の難民居住区に移動してから本格的な難民生活に入ることになります。この辺の事情についてはカンパラ通信第11回で紹介させていただきました。ご再読いただければ幸いです。

さて、このビディビディ居住区ですが、私が初めて訪ねてから2年数か月たった今では22万人規模の難民が居住し、ウガンダで最大の難民居住区となっています。南スーダンの政治情勢はやや落ち着いてきましたが、今でも南スーダン人の流入は止まっていないということでした。そして、日本の3つのNGOが今も難民支援の活動を物心両面から続けています。

2 南西端のキソロ町

キソロ町は、ウガンダの南西端のキソロ県の中心の町です。ルワンダとコンゴ民主共和国の国境までは10数分たらずの距離です。2017年2月、私は初めてこの町を訪ねました。この地方の出身で主にアフリカ諸国との関係を主管とするマテケ地域協力担当国務大臣からの招待でした。マテケ国務大臣は、ウガンダでも南西端に位置する生まれ故郷のこの県をこよなく愛し、昔からこの県の福祉や開発に一貫して努力を傾注してきた政治家です。彼が私を招待した理由の一つは、日本からの援助を期待してのものです。その様な理由から、施設が老朽化し設備も乏しい県立病院の視察とコンゴ民主共和国と国境を接する僻地の水道建設構想予定地の視察が組まれていました。時間に余裕があったので、加えて、コンゴ民主共和国及びルワンダとのそれぞれの国境ポイントも見せてくれました。



(ルワンダとの国境風景)



(コンゴ民主共和国との国境に立つ筆者)

2018年8月にキソロ町へ二度目の訪問をしました。実は、前回の県病院を視察した際に古い救急車が1台しかなく極めて困っているようでした。私は、日本の地方自治体が発して不要となった中古車両を開発途上国に寄贈する外交協会の事業に着目し、救急車1台を県病院へ供与することに成功したのです。

この救急車の寄贈式が昨年8月キソロ県病院主催で執り行なわれることとなりご招待を受けました。中古車ながら救急車はきちんと整備し直された形でウガンダに届けられましたので、マテケ国務大臣をはじめ多くの病院関係者に非常に喜ばれ、私もとても嬉しく思いました。そしてもう一つ大変嬉しいことが続きました。それは、マテケ国務大臣の関心がより強かった水道建設案に関してです。この案件は、必要とされる資金の金額が大き過ぎて日本の草の根・人間の安全保障無償資金協力のスキームでは対応が難しかったので頭を悩ませていたのです。しかし、マテケ国務大臣によれば、この水道案件のためにウガンダ中央政府からの資金の目途がついて案件が進行しているとのことでした。私は、これを聞いてほっとした次第です。



(寄贈された救急車の前でマテケ国務大臣と握手する筆者)

ところで、図らずもそれからわずか10日後に3回目のキソロ訪問をすることになりました。それは、コンゴ民主共和国からの難民の流入を視察することになったからです。コンゴ民主共和国東部地域は以前から中央政府のコントロールが行き渡らず、多くの反政府系民兵勢力の存在が同地域の治安を不安定化させてきました。そのためウガンダと国境を接するこの地域の人々は治安が悪化する度にウガンダとの国境を行ったり来たりしていました。しかし、昨年末に予定されていたコンゴ民主共和国の大統領選挙が近づく中で反政府勢力が勢いづき治安の悪化がひどくなり、ウガンダに逃げて来るコンゴ人が多くなってきました。駐ウガンダ・ドイツ大使及びEU大使から、一緒にコンゴ難民の受入れを視察しようと呼びかけられ、8月17日にキソロ入りした次第です。実は、ウガンダとの国境に近いコンゴ民主共和国東部地域では8月1日からエボラ出血熱が流行し始めたという事情もあり、ウガンダの国境ポイントでも健康管理の為に警戒態勢を取り始めた時期でもありました。ということで、国境を越えて入って来る人々の一人ひとりをガン・タイプの赤外線放射温度計で検温してエボラの疑いのある人をチェックしていました。一方、2018年1月にウガンダ国内での難民の受入れ・登録で不正が行われているとのスキャンダルが発覚したことを契機に親指の指紋だけを取って登録していた登録難民数も実際を反映していないということで、バイオメトリックスの手法による再登録手続をしている現場を視察するなど、難民受入れ対応を行っている最前線を目の当たりにしました。

コンゴ民主共和国の大統領選挙が大きな混乱なく終わったといえども、ウガンダの最南西端地域は、このコンゴ民主共和国からの難民対応という観点から同国の政治・治安情勢の今後の展開を注視する必要に加えて、エボラ出血熱の越境を防ぐ必要性和相まって、まだまだ目が離せません。

そしてもう一つウガンダの最南端ということでは、マウンテンゴリラについても触れておかなければなりません。ここキソロ県は、北に行けば、マウンテンゴリラが世界でも最大規模で居住するブウィンディ国立公園があり、ユネスコの世界遺産に指定されています。

南はキソロ町と隣接した形でムガヒンガ国立公園となっています。ここは、ルワンダ及びコンゴ民主共和国と三ヶ国の国境を接する地域が一体となってマウンテンゴリラの生息地となっており、マウンテンゴリラの保護活動と観光客のためのゴリラ・トレッキング活動を両立させています。マウンテンゴリラは世界でもこの地域にしか居住していないことから、ウガンダの貴重な観光資源となっています（マウンテンゴリラについてはカンパラ通信第22回も参考にしてください。）。

3 北東端のキデポ国立公園

前二者に比較すると、ウガンダの北東端訪問は比較的最近のことです。ウガンダの北東部はカラモジャ地域と呼ばれ、ウガンダの他の地域とは人種的にも文化的にも大きく異なります。この地域で生活しているのは放牧牛を伴って牧草を求めて放浪生活を主体にしているカリモジョンと呼ばれる部族の人たちで、放浪生活が災いしてでしょうか他の地域と比べると文明的にはだいぶ遅れている印象を受けます。ケニア側にもやはりトゥルカナ族と呼ばれる似たような部族がおりまして彼らも牧草を求めてウガンダ領に入って来ては牛を略奪するということでお互いが銃で武装して争いを繰り返している時期がありました。前回の私の赴任時期に当たる2000年代後半には、銃の所持がカリモジョン族に蔓延していることが同地域の治安を不安定化させているという認識から、ウガンダ軍は彼らから銃を取り上げるために容疑不十分でも逮捕を辞さない強硬な鎮圧作戦を強行していました。これが人権弾圧につながっているとの理由でウガンダ国内の国連その他の国際団体から批判の対象になっていました。しかし、このような非難にひるまずにウガンダ軍がカリモジョン族の銃狩り作戦を強行し続け、2010年に入ってから徐々にカラモジャの武装放牧民から銃を取り上げて治安の安定に成功したようでした。私が2016年に改めて着任した時には状況は大幅に改善していました。

ところで、外務省では国ごとに危険情報というのを発出しています。危険情報は、渡航・滞在にあたって特に注意が必要と考えられる国・地域に発出される情報で、その国の治安情勢やその他の危険要因を総合的に判断し、それぞれの国・地域に応じた安全対策の目安をお知らせするものです。その様な理由から、各大使館は定期的に危険情報を見直しし、現状にあった改訂を行うようにしています。この観点から、危険度が高いこのカラモジャ地域についても一度現地に足を運んで自分の目で治安状況を確認するため、現地警察や国連関係者に話を聞くことにしました。それに着手したのが2018年9月のことです。この視察旅行では、カラモジャの北東端にある、ということはウガンダの北東端にあるということにもなるのですが、キデポ国立公園にまで足を伸ばすことにしました。キデポ国立公園は、1960年代に既に国立公園に指定されていましたが、首都カンパラから一番遠い所にある国立公園であること、加えて上記のような周辺地域の不安定な治安状況であることから、多くの観光客にとって縁遠い国立公園と考えられていました。しかし、CNNトラベルが2016年にこのキデポ国立公園がウガンダで一番の魅力的なサファリである

と認定し、2018年にはアフリカのサファリ・パークの中でもベスト8に数えられると推薦しました。このような動きを踏まえて、今後日本からの観光客も増えるかもしれないと思いうガンダの最北東端まで足を伸ばすことにしたのです。



(国立公園にかかる面白い雲)



(国立公園の治安責任者と筆者)

実際にキデポ国立公園を訪ね、北は南スーダンと、東はケニアのトゥルカナ地域と国境を接するのですが、ウガンダ軍がしっかり国境を守っていること、南スーダンからの難民の流入はあることはありますが数的に多くなく、管理可能な数であるということ把握することができました。この視察に基づき、日本の外務省にキデポ国立公園及びカラモジャ地域全体の危険度の引下げを進言し、嬉しいことに2018年11月にこれが受け入れられ、今ではキデポ国立公園や大部分のカラモジャ地域の危険度が首都カンパラ並みへと下がりました。私のウガンダ北東端のキデポ国立公園の視察の結果で危険度が下がり、ウガンダへの潜在的な日本人訪問者にとって同国の魅力を一層引き立てることになるのであればこんなに嬉しいことはありません。

4 南東端のブシア町

最後は、南東端の町への到達の話です。昨年9月に北東端を訪れたので後は南東端を是非踏破したいと思うようになりました。その機会は意外と早く訪れました。実は、9月末から10月の初めにかけて長野県の立科町から町長を団長とするウガンダ訪問団が訪れたのがその理由です。立科町は、その標高の高さ故に中長距離走練習の適地と言えます。その点に着目して2020年の東京五輪・パラリンピックの時にウガンダ選手団の中でもメダル獲得が有望な中長距離選手を受け入れるホストタウンとなる登録申請を内閣府に行い、2018年2月に認定されていました。立科町の代表団のウガンダ訪問の最大の目的は、滞在中に教育スポーツ省及びウガンダ五輪委員会との間でスポーツ交流に関する覚書に署名することとともに、ウガンダの中長距離選手のメッカであるウガンダ東部の町カプチョルワを訪問することでした。私もウガンダの教育スポーツ省及びカプチョルワ県知事

から立科町代表団と一緒にカプチョルワ町を訪れるよう招待を受けました。この機会を利用して、カプチョルワ町から約160km（3時間弱の走行距離）離れた、ケニアと国境を接するウガンダ南東端のブシア町を9月30日に訪れました。この町を訪れる理由はそれだけではありませんでした。実は、JICAは東アフリカ地域の国際貿易円滑化の能力向上を図るため、ワン・ストップ・ボーダー・ポスト事業や通関業者などの能力向上を通じた物流の円滑化を支援しており、その実施場所の一つがケニアとウガンダとの物流を担うブシア町の税関だからです。



（ワン・ストップ・ボーダー・ポスト）



（入管事務室も両国並んで）

ウガンダの歳入庁の知合いに事前に連絡して、税関施設見学をアレンジしてもらいました。この事業の下でウガンダとケニアの両国の税関は協力して、ウガンダ側からケニアに入るトラック等は一度だけ両国の税関の共同の検査を受け終了するとそのままケニア国内に移動できます。逆も同じく両国税関の共同の検査を受けた後ケニア側からウガンダに入るといふ具合で、通関がウガンダ側とケニア側で各一回計二回の税関を受けることなく短い時間で国境の通過が可能となるという訳です。また、トラックのドアを開けずに中味の荷物が何であるかを視ることができる高性能透視カメラの設備も見せてもらいました。これも検査の迅速化に貢献しているようです。少し残念なことにこの透視カメラ機器は中国製で中国からの寄贈ということでした。いずれにせよ、ウガンダにとって物流上最も重要な税関施設を視察してどのような税関手続がされているのか、国境付近の車両の通行の頻繁さを経験してケニアとの物流の量とウガンダにとってのその重要さについて実感できたことは私にとっての成果でした。

（以上）